

「肝癌の低侵襲治療」

大阪大学医学部教授・生体情報学 中村 仁信 編著
大阪大学医学部助教授・病態情報内科学 林 紀夫

奈良県立医科大学附属病院長，教授・放射線医学

打 田 日出夫

日常診療に不可欠である肝癌の低侵襲治療を包括した単行本は皆無であったが，中村仁信教授と林紀夫教授のチームにより，最新の知識と考え方を豊富に取り入れた平易で簡潔な成書を発刊されたことは，医療における大きな福音である。

低侵襲治療の考え方，肝癌のスクリーニングの確定診断の項では，必要な事項が要領よくまとめられている。また，治療法の選択基準では，TAE，PEIT，併用療法，マイクロ波凝固，動注リザーバーと多岐にわたる低侵襲治療の選択について，腫瘍結節の大きさ（3 cm 以上と以下）と性状（塊状型と浸潤型）に分けて，形態と機能の両面から整理して解説されている。低侵襲治療のテクニックの項では，TAE，CT を含む PEIT などの実際をわかりやすく解説しており，カテーテルの使用法，TAE における血管造影，TAE の方

法，リザーバー動注化学療法などでは，分担執筆者の個性と流儀が感じられ，興味深く読んだ。治療後のマネジメント，特に再発の診断と再治療は肝癌の治療における忘れてはならない課題であるが，重要なポイントが記述されている。また，合併症についても便宜的に内科的と放射線科的対応に分けて整理されており，最後に患者への日常生活指導にも言及している。治療のみに終始しないで患者を全人的な QOL の観点から診ることの重要性を示唆しており，教示されるところが大きい。

20 年以上も昔，超選択的肝血管造影や TAE の草分け時代にともに究め汗を流した朋友が，ここに成果を世に示されたとは，この上ない誇りと慶びであり，心から祝福の意を表したい。集学的治療，チーム医療による低侵襲的な医療の重要性が叫ばれている中で，肝癌の診断から低

侵襲治療，更には治療後のマネジメントに至るまで，一貫した指針に基づいて取り組んできた内科と放射線科によるチームの成果が集大成された。知識や文献に走りすぎることなく，診療に立脚して实际的にわかりやすく書かれており，本書は正しく時代のニーズに答えた名著である。また，内容の多くが普遍的であり，私の意見とも一致していることもうれしいことである。本書は肝癌の診断から低侵襲の治療までのすべてを網羅しており，放射線科，内科，外科の専門家だけでなく広く研修医を含めた臨床医の診療，研究，教育に役立つことを確信し，一読することをお薦めする。

● B5 頁 224 図 66 写真 250
カラー写真 2 表 29 1999
定価（本体 8,500 円＋税） 円 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)